

モニタリング報告書

1. 事業の概要

事業名	熱海土石流被災猫の保護事業				
開始日	2021年11月1日	終了日	2022年6月30日	日数	242日
団体名	NPO くすのき		担当者名	那須 美香	

総額（税込）	987,200円	スタッフ人数	4人
--------	----------	--------	----

事業目的	<p>熱海市の土石流被害でペットを飼うことができなくなった被災者の猫を預かり、飼育することで、飼い主が安心して避難生活を送れるようにする。また、被災地で飼われていた猫の里親を見つけ、猫が平穏に暮らせる環境を整えることで、猫とひとが共存するやさしいまちづくりに貢献する。</p>
事業背景	<p>2021年7月3日に熱海市伊豆山地区で発生した大規模土石流災害を受けて、くすのきは民間災害時動物救済本部（CDCA）と連携し、同地区に取り残された動物のレスキューを開始。これまでに猫を中心に約100匹を保護した。保護した猫の中には、被災者が飼っていた猫2匹と災害で亡くなった住民が飼っていた4匹が含まれている。100匹のうち、人馴れ度合いから半数近くが元々飼い猫だった可能性がある。残りの半数は人に馴れておらず、地域猫の可能性が高いため、避妊・去勢後に元の場所に戻す予定である。</p> <p>新たに保護した猫を飼育するための場所として、3箇所目となるシェルターを開設した。飼われていた保護猫は譲渡する必要があるものの、被災地の猫をレスキューし、シェルターを確保したり医療面でのケアをしたりする災害対応業務に追われて通常業務の譲渡活動ができない状況になっている。</p> <p>東京で開催されている月2回の譲渡会に参加できないことで、譲渡による収入が途絶えている。同時に、保護した猫の飼育の長期化により、食料費や医療費が膨れ上がっている。このまま保護（入口）と譲渡（出口）のバランスが保てない状態が続くと、団体運営が厳しくなることが懸念されている。さらに、新型コロナウイルス感染拡大による非常事態宣言発令を受け、テンプルキャットは臨時休業を余儀なくされている。</p> <p>くすのきでは、支出の大部分を猫の医療費、エサ代、消耗品費、家賃で占められていることから、代表含めスタッフ全員が無償で活動している。団体の運営は、代表1人、コアスタッフ3人、ボランティア数人で担っており、各自が空いた時間を利用して活動している。猫への投薬などの医療面でのケア、取材対応、他団体との連携は那須代表が中心となって実施し、他のスタッフがそれらの活動をサポートしている。ウェブサイトやSNSの更新、クラウドファンディングはボランティアが担当しているが、発信内容や発信頻度が限定的となっている。そのため、資金調達につながる効果的な情報発信を行うことが当面の課題として挙げられる。</p>
事業内容	<p>コアスタッフの活動日数を増やすことで、災害対応業務と通常業務を両立できる運営体制を整える。</p> <p>東京の譲渡会に毎回参加し、約50匹の保護猫の里親を見つける。また、オンライン譲渡会や東京と熱海以外で譲渡会を開催することで、里親探しを加速させる。</p>

	<p>譲渡されるまでの間、猫が安心して暮らせる場所と健康的に過ごすためのフードを確保し、必要に応じて医療を提供する。</p> <p>猫の飼育や譲渡会の様子、被災地の復旧・復興状況などの情報をホームページやSNSで定期的に発信することで、ファンドレイジングにつなげる。</p>
--	---

2. 事業の評価（評価者：田上、井上）

最終評価実施日：2022年9月29日

(a) 妥当性：変化する被災地の状況やニーズに柔軟に対応していたか、事業実施のタイミングはよかったか

- ・ホテル避難など、地域特性が色濃くでた被災状況で、今までの被災地とは少し違った支援の仕方が必要だったのかと推察されるが、動物と暮らしていた被災者や、地域で暮らしていた動物の被災以降の生活に焦点をあて、事業を展開したことは、忘れられがちだが大切なニーズに則しており、実施タイミングも適切であったと考えられる。

- ・被災直後の混乱により、行政の対応が難しかったニーズに対して迅速に活動していた。

(b) 有効性：目標を達成できたか、活動は目標を達成するための手段として適切であったか

- ・目標設定としていた数字には届かなかったものの、譲渡頭数87匹（伊豆山猫7匹）、譲渡会13回譲渡会参加数148匹は目標に対して適切にアプローチを行っていたと考えられる。

- ・一方で、保護数に対して、地域に返した数や、被災者のもとに今後帰っていく数がどう推移するかが未定な部分もあり現段階での評価が難しいが、そもそも被災猫の譲渡などはかなりハードルが高いのだと認識し、その認識の上で、伊豆山猫7匹は確実な成果である。

災害後の動物保護という大枠の目標に対する手段としては適切であった。

(c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

- ・保護猫数に対しての譲渡数については上記に記述した。保護する際のCDCA（民間災害時動物救済本部）との連携、地域への啓蒙活動やWEBによる情報発信など、適切な手法をとっていたと考えられる。

- ・オンライン譲渡会の活用までには至らなかったが、それぞれの猫の状態も考慮したうえで地域外での譲渡会・熱海市内での店頭譲渡を並行して積極的に行われていた。

(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティと連携できていたか、終了時のタイミングや方法はどうか

- ・発災後の一定期間は混乱等から町内会などと連携を取ることができなかったが、住民がもどってきている地区へは、回覧など情報発信で連携しようという姿勢がある。また地域コミュニティではないが、前述の CDCA や、災害以前からの獣医との連携など、適切な連携相手とつながる、協働を行っていると感じた。

- ・事業終了のタイミングについては、災害後一定期間過ぎると、被災猫と地域猫の区別も難しいため、終了は適切だと思われる。ある程度落ち着いた時期に、同行避難や地域猫の去勢など、地域に対し必要な啓蒙を行っており、平時に移るための取り組みも行っていると感じた。

(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

- ・被災者のペットや被災猫以外にも、地域猫に対する去勢など、地域が動物とどう向き合うかなど、災害時は後回しにされがちでありながら、どんな地域でも共通する課題に取り組んでいる。

- ・被災猫の保護を通じて、被災者だけではなく、地域全体の生活が安定することに貢献した。

(f) 先進性・独自性・模範性：様々なアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

- ・被災地ではペットの有無により、被災後の生活が大きく左右される。ペットをもつ家庭では、避難所への入所、在宅を判断した場合の生活、仮設への入居、仮設からの退去と再建などさまざまな場面で難しい選択を迫られる場合が多い。近年、こうしたペットを持つ世帯の配慮として、動物を連れていける避難環境や、ペット共生住宅など、一定の配慮はされてきているものの、「ペット」という視点での配慮のため、「動物」を中心とした環境整備としては不十分であり、動物を「家族」としている被災者に対して配慮が不十分な場合もある。

くすのきの事業は、被災動物の保護を中心に据えているからこそ、ペットシェルターなどでは逆説的に被災者が住居の選択をする際の多様な選択、地域猫の保護では地域に戻った時の再建後の生活の安心感の創出など、他の事業にはみられない独自性があり、生活復興をする上で忘れがちな視点をおさえた事業となっている。

- ・平時からの地元獣医との連携などは、仮に他の地区で災害があったときにそうした体制の有無で動物の支援や、ペットを持つ被災者への支援のクオリティが格段に違うため、そうした体制構築の重要性は他地域でも事前防災として構築していくべきである。

- ・また被災者のニーズ調査などにおいて、ペット等の状況を合わせてヒアリングをしているようになると、ペットを飼う飼い主の再建加速にもつながっていくと感じた。

(g) 自立性・継続性：自ら資金を獲得できる体制作りができているか、また事業を継続していくための体制整備や工夫がされているか

- ・クラウドファンディングの実施や物資等の寄付集めにおいて多様なツールを使い、継続的な情報発信することで、事業終了後の支援にも繋がっており、資金獲得をする力はあると感じる。

- ・体制整備については、人員不足は否めず、ボランティア等にもある程度スキルが求められるため、裾野を広げて人を募り、JOINしてもらいながら「使える（動ける）」人材をどう育てていけるかは課題と感じた。

3. 評価者の所感

災害支援の分野で、不審な団体が出入りすることも多いが、動物に対する支援の分野でもそれは顕著で、イニシアチブの握りあいや成果の取り合いなどがあり、協働が難しいという話が印象的でした。

人に対する支援や災害支援において、連携相手を見極めるプロセスや、複数団体が協力して支援にあたる体制はこの10年でだいぶ進歩したように思えるが、動物愛護・動物保護の分野ではまだまだであると思いました。

また、同行避難が可能な避難所などの環境の悪さなどの話も聞き、動物とともにくらす人間が生活再建をしていく過程を考えて、見直さなければいけない部分はまだまだ多いと感じました。（田上）

平時より災害時についても考慮に入れた連携体制ができていたことが、被災後の迅速な活動に繋がっていたことを改めて理解できた。継続的な情報発信とメディア対応が資金調達に繋がった事例でもあったため、今後の知見としたい。（井上）